

## 若い理系・技術系の人に薦める書籍とその理由

2014.06.24

松井潤吉

私事で始めることをお許し下さい。私は1961年に大学の電気工学科を卒業して、総合プラントエンジニアリング会社へ勤務し、1999年に退社した元技術者です。振り返りますと1970年代までは国内のプラント市場が旺盛で、我が国の重化学工業化の波に乗って順調に業績を伸ばしていましたが、公害問題の発生や需要の飽和・頭打ちで競争が激化し、利益率の減退を余儀なくされました。生き残る道は発展途上国の需要に応じて海外市場へ打って出るしかありませんでした。そこで問題となったのが「社員の国際化教育」でした。今から思えば信じられないような議論、たとえば「英語が先か、技術が先か」などというバカなことが真剣に論議されていました。

「生き残るため、食うため」には、とにかく万難を排して海外の市場で仕事を獲得しなければなりません。全く慣れていない、また先生役もいない状況を試行錯誤で進めたものでした。幸い1980年代からは中東をはじめとした（膨大な石油収入を手にした中東諸国は一斉にプラントの建設を進めてくれたので需要は旺盛でしたので、その波に乗ることができました）海外プラントの仕事で、再び成長軌道に乗ることができました。

その過程を経験した筆者は、「国際化」という言葉に関してこだわりにも似た考えを持っています。僭越ですが経験から言わせてもらえば、社会一般に言われる「国際化」は英語ないしは主要な外国語に精通し、読み書きだけでなく会話を含めて流暢になること。加えて海外の事情に通曉して海外で発生する事物に関して自分なりの考えを持つこと、などかと思えます。しかし、筆者はかなりのこだわりを持って以下のような定義で「国際化」を考えています。

1、出会った相手をよく理解して、尊敬するに至るまでのオープンマインドな関係を造れること。そのためには、相手の文化、知識、宗教、経済、などまで理解して、彼の出自、歴史、価値観なども理解できることが望ましい。

2、日本人たる自己について、上記同様の背景、よって来るところ、出自、文化、などを説明できること。いわゆる胸襟を開いて付き合える関係を作り上げるために必須。

この二つがどうにかできるようになって初めて「国際化の緒についた」と言えると考えます。

つまり、外国語に堪能しただけではとても国際化したとは言えないと思うのです。ですから単に1～2年留学した、あるいは海外生活を過ごしたなどというだけでは、それだけではとても「真に国際化」したとは言いがたいのです。その間、出会った相手とどのような関係を築いて、オープンマインドでどれだけの深さで理解しあえたか、自分に関して相手にどれだけ理解させたか、言い換えればどれだけ説明したか、などが重要と思えます。ですから逆に1年とは限らず、自分の努力次第では3ヶ月～半年でも相手と十分な関係を築くことはできると考えます。

ところで、筆者は先述の通り、1999年に退職しましたが、その後リスクマネジメントを勉強する必要に迫られて何冊かの本を読みました。真の国際化の先生役はいなかったと書きましたが、探した結果、それに該当する乃至はそれに近い良い本がいくつか見つかりました。このようなモ

ノは後になって見つかったことが多いのです。皆様はまだ社会へ出で間もない若い諸君と理解しますが、そのために「真の国際化」を勉強するに有用な本に出会う機会も少ないと推察します。また、既に卒業された肝心の学校教育については、「真の国際化」に関するアクティビティーは国内の大学については絶望的です。従って英語に関しては一時よりはかなり強化されていますが、いわゆる「英語読みの英語知らず」で「真の国際化」教育はほとんどゼロベースと言っても過言ではありません。(教授陣が「真の国際化」について理解していないため) 学校では高い授業料を払ったのに何もしてくれなかったとクレームを申し立てても既に遅すぎるので、筆者のような経験者のアドバイスに従って入手できる書籍などで勉強すれば、少なくとも筆者達よりはるかに効率的に「真の国際化」に近づけ得ると考えますので、以下に推薦図書を一覧します。

## 推薦書リスト

### 1、「1984年」 ジョージ・オーウェル著 1949年 早川文庫他に訳本。吉田健一訳も。

1949年において世界で最も大きな問題を投げかけた「一種の社会派SF」。当時のソ連を想定した(筆者の推量)「恐怖の全体主義政治体制」を、今日では全く問題なく実現できるITを1949年において35年後の1984年を想定して書いた驚異的なSFである。

アングロサクソンの極一部にはこのような小説が書ける優秀な人材が存在するという証明でもある。技術者としての創造力が使い方を誤ると社会へ怖ろしいインパクトになるという事を勉強できる得がたい一冊。1960年代に我々の年代はこの本によって「技術の恐ろしさ」を学んだのである。

### 2、「自由からの逃走」 エーリッヒ・フロム著 1941年(1980年没)

現代社会科学叢書 日高六郎訳 東京創元社

世界を第2次世界大戦へ導いたドイツ・ヒトラーは合法的にドイツ国民から選ばれたのである。クーデターや革命など非合法的手段で総統に座ったのではない。

第1次世界大戦の後、ドイツ国民は大きな自由を獲得したが、その代わり国は乱れ経済は疲弊した。その結果、自由に疲れ果てたドイツ国民は、強権の恐れを感じつつ自由から逃避してでも国の安定を求めたのであり、その結果がヒトラー総統であった。世界の人々が希求して止まない「自由」も、長いあいだそれがために庶民の生活が脅かされると自由を放棄してでも強権政府を求めることになる。その経緯を詳しく知ることが出来る良書であり、「自由」というものは単純に理想視してはいけないものであることを知る。「自由」とはなにかについて考えさせてくれる。

### 3、「世界文明における技術の千年史」アーノルド・パーシー著 1990年 新評論社 東玲子訳

アラブの王様がニューヨークを見学に来て、帰り際に何かお土産をあげると言われた時に、「水道の蛇口が欲しい」と言った。この嗤い話を日本人は嗤えない。近代技術の根本的原理原則を勉強せずに、結果だけを欲しがって輸入したのはつい先日である。福島第1原発の

原子炉がその好例であり、我が国特有の事情へ馴染ませる工夫を放棄した結果が先日の原発災害である。技術者は「技術史」を最低限、勉強しないと完璧な仕事はできない。

我が国が技術立国と言われるその技術は何時、どこから来たのかを知る必要があり、先達の苦勞を知って初めて腑に落ちるのである。

- 4、国際市場へ打って出て、仕事を獲得するのは「戦い」である。孫子の兵法に「彼を知り己を知れば百戦危うからず」というのがあって、これは真理である。そのためには日本人の特性（長所・短所の類）を自覚し、同時に「彼」について理解しておく必要がある。「我々は気候温暖な地で長く農耕を営んできた民族」であり、「彼」とは中国人、朝鮮人、欧米人であり、彼らは皆「平原に獲物を追った狩猟民族」である。まず己（われわれ日本人）を知る良書から3冊を薦める。

4-1、「敵を作る文明、和をなす文明」川勝平太・安田喜憲共著 2003年 PHP研究所  
現静岡県知事 川勝氏（専門は比較経済史）と安田氏（専門は環境考古学）の共著  
安田氏は世界の文明を「畑作牧畜文明」と「稲作漁撈文明」に分けて考えている。アングロサクソンは畑作牧畜文明であり「敵を作る文明」であると説く。

4-2、「日本人とは何か」上下 山本七平著 1989年 PHP研究所  
山本七平氏が外国人向けに日本の文化等に関して行った講演録から興した日本文化の特性の解説書。神話の世界から近代まで、その行動原理を探る。

4-3、「日本的集団主義 その真価を問う」濱口恵俊・公文俊平共著 1982年 有斐閣  
日本人の「集団主義」は有名である。「個人を抑えて集団としての意向に従う」とは外国人の一般的評価である。はたしてその見方は正しいのか？個人の意識構造にまで踏み込んで、実情はもっと複雑な意識に基づくことを明らかにした研究。

- 5、「トヨタの労働現場」井原亮司著 桜井書店 2003年  
世界に冠たる自動車工業の雄、トヨタの生産現場の実情を冷静に報告している。世界からの高い評価で見えなくなってしまう恐れがあるトヨタの実情でも、その現場とはこのようなものであると示している。JIT、カンバン方式、大野氏の「7回の何故」指導などで有名な現場の実情を示している。生産会社の「現場」とはこのようなものである。

- 6、外国人は日本人をどのように見ているか？これを知ること己を知る事の助けになるし、外国人の考え方を理解できることになる。

6-1、「敗北を抱きしめて」上下 ジョン・W・ダワー著 岩波書店 2001年  
三浦陽一・高杉忠明訳

「第2次大戦後の日本人」という副題を持つ本書はピューリッツァー賞の受賞作。日本は常に帝国の辺境にあった故に外から日本がどのように見られているかは常に日本人の大きな問題であった。それに答えるひとつの回答が本書であり、戦後社会を正しく理解できる。

6-2、「転換期の日本へ」ジョン・W・ダワー／ガバン・マコーミック共著 NHK 出版新書  
2014年 明田川 融／吉永ふさ子訳

尖閣諸島・竹島問題など我が国と近隣諸国との外交問題が大きくなっている現代。根底に流れるのは第2次世界大戦の終結を不完全なまま今日に至っているとの問題がある。近未来の我が国の進むべき方向を示唆する米国人のアドバイス。

7、「生きがいとは何か 自己実現への道」小林 司著 NHK ブックス 1989年

これから社会に大きく貢献していただくためには、「働く」ためのモチベーションを高揚・持続させなければならない。近年の研究によれば「モチベーション」とは「外的動機付け」と「内的動機付け」の両者が相まって強くなっている必要がある。そもそも「働く」ことにおいて「内的動機付け」を動かす「生きがい」とは何か？精神科医が易しく解説してくれる良書。

以上の通り 10冊をリストしました。読んで欲しい本はまだたくさんありますが、上記の通り「真の国際化」を達成するに良き指針を得られるものを中心に選んであります。

我が国の人口は減少し、国内市場は縮小することが必然と考えられる中、我が国が生き残るためには国際市場へ打って出るしかありません。それを実現できるのは真に国際化した人材です。若い方々がぜひそれに挑戦してくれることを祈念して厳選したつもりです。

以上